



藁治療



川崎ゆき

池か川に落ち、溺れそうになったとき、何か掴まるもの、すがるものがあれば何とかなる。藁にでもすがる思いというのがある。しかし藁は浮くが、ウキにはならない。ただ、大きな藁束なら何とかなるかもしれないが、ストローのような藁では何ともならない。しかし、他にすがるものがないのなら、藁にでもすがるのだろう。

その藁の名の付く祈祷師がいた。藁山道士と勝手に名乗っている。ただの藁でも山のようにあれば、船のように乗れるかもしれない。藁も積もれば船となる。

「にっちもさっちもいきません。万策尽きました。あとはもう運しかありません」

「うん」

「何とかならないものでしょうか、藁山道士の術で」

藁山道士は祈祷師だが、占いもする。針もすればお灸もし、指圧もすれば、整骨もするようなものだ。

「万策尽きましたか」

「はい」

「全ての努力は成されたのですな」

「はい、もうこれ以上手の打ちようがありません」

「そうですか」

「祈祷で何とかありませんか」

「私の祈祷は人を幸せにする祈祷ではなく、不幸せにする祈祷でしてな。あなたの願いを叶えるには、邪魔をしている相手を呪うことになりましたが」

「特にいません」

「ライバルとかは」

「いません」

「ほう、それは困った」

「私自身の問題なのです。懸命にやっているのに、怠けているわけでもなく、またやるべきことをやらないで愚痴っているわけでもありません」

「どういう方面でのお話しですか」

「時代だと思われます。私の時代は終わったのでしょうかねえ。これには負けます。しかし、細心ながらも続けていきたいのですが、最後の仕事も終わり、ここ何年も暇で暇で仕方ありません」

「そのまま廃業された方がよろしいかと」

「それでは暮らし向きが立ちません。何とかならないものかと……」

「はい、藁にでもすがる思いで来られたわけですか」

「そうです。是非とも藁山先生のお力で」

「これは祈祷も何もありません」

「はあ？」

「簡単なことで、流れが変わり、細々とながらも仕事に来るでしょう」

「そう占いに出ていますか」

「占うまでもない」

「何ですか、その方法は」

「万策尽きたのでしょ。祈祷でも、呪いでも、その状態では効きません」

「教えて下さい。その方法を」

「今までやったことのないことをしなさい」

「はあ」

「地味なことで、仕事とは関係のないことで、長年やらないで放置しているような事柄があるでしょ」

男はしばらく考えた。

「見付かりましたか」

「色々あります。そう言われれば」

「その中から地味で、長く時間のかかることを選びなさい」

「はい」

「一番面倒で、いやなこと」

「あります。思い出したくもないし、見て見ぬ振りをし続けているものがあります」

「それを始めなさい」

「はあ、しかしそれは仕事とは関係のない……」

「その方がいいのです。これはツボです。痛い箇所に針を刺すのではなく、そのツボはかなり離れたところにあります。足の裏とかにね」

「はあ」

「あなたが長く放置していたという、そのことが、その離れたところにあるツボかもしれせん」

「分かりました。他に方法がないのなら、それをやります」

「一つのことを動かすと、別のことが動きます。ただし」

「何ですか」

「ただし、そこが本当のツボかどうかは分かりません」

「でも、やってみます」

「上手く行けば、それで、流れが少し変わります。塞がれていた流れが戻ってきたりしますから、お楽しみに」

「はい、やってみます。どうせやらないといけない礼事でしたから、この機会にやり始めます」
この薬治療、効いたかどうかは分からない。

了